

青森県特別支援教育在り方検討会議 第1回調査研究部会報告【概要】

資料 1

●：意見、△：課題

① 教職員の専門性の維持・向上の特別支援教育に係る研修の充実

■ 対応すべき専門性の増加についての具体的相談内容

● 病弱

- ・登校できなくなり、病院の先生に勧められて学校見学を希望。

● 肢体不自由

- ・教育支援委員会を経て市町村立小学校へ入学後、不登校となり、特別支援学校へ相談が返ってくる。

● 聾学校

- ・発達障がいや愛着障がいについての相談が多い。

● 知的

- ・就学前や中学校卒業後に関する進路相談についての相談が多い。
- ・最近は高等学校からも障がいのある子をどのように指導すればよいかという相談もある。

■ 専門性向上に向けた取組

● 若手の人材育成

- ・経験年数を重ねてからだけではなく、若手教員の段階から計画的・戦略的に人材育成を進めるべき。

△ 研修への派遣や実践的な学びの機会を早期から確保する仕組みづくりの検討

② 体験格差

■ 障がいのある人の幼児期からの体験機会の確保

● 在学中の学校からのアプローチ

- ・昨今は、外的要因での制限（施設の利用制限等）はある程度緩和されてきていると思う。
- ・自分で制約をかけていることも1つの要因と考えられることから、学校在学中に体験の間口を広げてあげるといようなサポートが何かできればよいと考える。

③ 自閉症・情緒障がい学級在籍の児童生徒数増加と卒業後の進路

■ 自閉症・情緒障がい学級のこどもたちの進路

● 高等学校入学後の追跡

- ・中学校で通級指導を受けていたこどもが、高等学校に入ってから通級指導を受けているのかは分からない。この点もデータとして把握する必要がある。

● 高等学校、高等部の卒業生の進路

- ・卒業した18、19歳以上になったこどもたちがどのような進路に進んでいるかまで調査しなければ本質は見えてこない。

④ 校名変更

■青森若葉養護学校

●学校運営協議会委員や学校の職員

- ・漢字、ひらがなのどちらがよいという積極的な意見はなかった。

●マスコットキャラクター「わかばちゃん」

- ・マスコットキャラクターはひらがな表記である。
- ・ひらがなでも、こどもたちは抵抗ないのではないか。

■盲・聾学校

●盲学校

- ・名称のイメージで、全盲ではないから対象ではないと考える場合もある。
- ・コミュニティスクールでは委員全員が視覚支援学校に変更することを賛成。

●聾学校

- ・聾という「聞こえなくてもありのままでよい」の意味を持つ言葉を大事にしたいという意見が出た。
- ・保護者アンケートの結果、変更の賛否は半々。
- ・職員アンケートの結果、特に歴史や伝統を理由に聾学校のままがよいという意見が出た。

⑤ パートナーシップ活動

■事務局・学校側としての方策

●文部科学省実施のモデル事業

- ・青森県も手を挙げて推進していくべき。

●擬似教育実習

- ・約1週間でも授業に関わるといった体験ができれば教員の学びも大きく変わると思う。

△移動距離の制約

- ・特に郡部など、本県の地理的特性をどのようにクリアしていくかが課題である。

■児童生徒への還元

●学習機会の拡大

- ・ニーズに応じて、地域の高等学校と特別支援学校の生徒が相互の授業を受け合えるシステムができれば、特別な支援を要する生徒の進路選択が広がるのではないかな。

⑥ 自立活動

■特別支援学級担当者の経験不足、自立活動を理解していない方への対応

●学校教育センター主催研修の内容充実

- ・自校の実情の研修内容になっているか継続的にニーズを調査していく必要がある。
- ・実践に結びつく具体的な内容が充実すると、より活用しやすい研修にもなりうる。

△校内研修の機会確保

⑦ 小学校における巡回型通級指導

■ 送迎等の課題で通級を受けることを諦める保護者へのアプローチ

● 休暇制度の充実等

- ・巡回指導を受けられることが望ましいが、大人の側の体制を整えることも一つの手段ではないか。

■ 巡回型通級指導の充実

● 弘前聾学校の試行的取組

- ・まずは郡部の通級指導がない町村立小中学校をサポートできればと思っている。
- ・これを発端として、盲学校や病弱、肢体不自由などの支援学校へと広がっていけばよい。

● 青森市の小中連携 9 年制

- ・校内体制の整備にどのような影響を与えているのかを検証してもよいと思う。

△ 教育課程としての巡回指導

- ・弘前聾学校で実施している巡回指導は放課後に行っているため、教育課程の中で行えればよい。

⑧ 産業科の設備、教育課程の充実

■ 本県特別支援学校の産業教育及び設備の現状

● 本県のこどもたちの状況把握

- ・他県にも好事例はたくさんある。
- ・ただし、他県の実施事例を比較する前には、他県の産業科に就学しているこどもたちのレベルが、本県のこどもたちと同等なのかは確認していく必要がある。

⑨ 人事交流

■ 交流者の資質向上

● 意欲がある者の発掘

- ・特別支援学校で実現したい具体的な目的を持つ方に人事交流の機会を与えてほしい。
- ・人事交流に行った人は職員本人の意志に沿って行われたものだったのか。

● 教員採用試験採用枠の創設

- ・小中学校の特別支援学級採用枠を作るのもありではないか。

● 交流後の検証

- ・学校規模にもよるがその職員が中核的な存在になれているか検証が必要だと感じた。
- ・各学校の管理職が特別支援教育に携わってきた経歴があるのか職歴調査を行ってはどうか。

△ 特別支援学校の退避先解消

- ・小中学校で不満があったから転出というような、退避先になるべきではない。

■ 特別支援学校の中核的役割

● 特別支援教育の進歩の検証

- ・本来は、小中学校・高等学校の特別支援教育の発展に寄与する目的があった。
- ・平成 19 年から 20 年近く経った今、小中学校・高等学校における特別支援教育の進歩があったのか検証が必要だと思う。